田中治彦 著

『国際協力と開発教育
—「援助」の近未来を探る—』

明石書店 2008 年 B5 判 224 頁 ¥2000(税抜)

中村絵乃

「開発教育」「参加型学習」を長年実践・研究してきた筆者が「開発教育人生そのもの」という本書は，前著『南北問題と開発教育』から 14 年の年月を経て発行された。序章は，主人公「アイ子」がタイの村の学校を支援するために募金を募るところからはじまる。アイ子を通して筆者は疑問を投げかける。「あなたは寄付をしますか？ それともしませんか？ その理由は？」そしてアイ子の行動を追いながら，従来の援助のあり方，課題を考えていく。

日本の学校や地域で行われる援助は，モノやお金を集めて「途上国」に贈るタイプの「慈善型援助」が未だ主流であると筆者はいう。とはいえ，自分自身も含め，国際協力の専門家として活動している人でさえ，誰もが「アイ子」の姿勢に覚えがあるだろう。

前半では，開発援助のあり方を「慈善型開発」「技術移転型開発」「参加型開発」三つのタイプで解説し，タイとバングラデシュの具体例をとりあげて説明している。開発援助の発展型の頂点とも考えられる「参加型開発」はしかし，住民主体となり進められていくので，プロジェクトが見えにくく，支援者の賛同を得にくい，など現在の NGO が抱える問題も指摘する。

6 章以降は日本の開発教育・参加型学習についてその経緯・変遷の背景を述べている。筆者自身が設立当初からかかわり，6 年間代表を務めたＮＰＯ「開発教育協会」の活動の歴史もそれに含まれている。さらに「参加型学習」の系譜を読み解き，「参加型学習」こそが，「北」における開発教育と「南」における参加型開発が共通に基礎としてきた概念である，と指摘する。そこに，「北」と「南」が協力，協働するヒントがあるとも述べているのは興味深い。

とはいえ，日本における開発教育・参加型学習はまだ学習上の参加にとどまっており，社会参加にはつながっていない。すでに参加型開発を進めている南の国々で，地域社会にさえ参加できていない日本人が何を提供できるのか，との指摘にはうなずかざるをえない。

2003年に 1年間，タイで研究生活をおくった筆者の気づきには共感できる。「『援助されるべき存在』だと思っていた北タイの人びとに『援助』という言葉はしっくりこなかった，と。そして，『気持ちよく，楽しく』を大切にゆったりと暮らしているタイの人びとに，日々時間に追われて多くのストレスを抱えている日本人が『援助』することなど滑稽ではないか」，と（あとがきより）。

本書でも述べられているように，農村の過疎化，少子化，都市の貧困，環境破壊など，現代社会が抱える問題は日本もアジアも共通していることが多い。こういったことを豊かな「北」が貧しい「南」を助けるのではなく，「共通の課題をもった日本とアジアの NGO が共通の問題の解決に向けて協力していく」という発想の転換こそが重要なのであろう。

開発教育を実践しながら，市民活動を通して国際協力の推移も見つめてきた筆者の期待は，「社会参加」のあり方へ向けられる。学生が身近な地域で行ったアクション・リサーチの事例から，筆者が参加型学習を重視し，「社会参加」をめざして実践している姿がうかがわれる。「社会参加」といわれると概念が大きすぎで萎縮してしまうが，まずは身近な地域や課題について関心をもち，「参加」を経験し，「達成感」または「効力感」を感じていくことが重要なのではないかと，本書を読んで改めて考えた。

巻末には国際協力・開発教育に関する年表，用語集が付いており，言葉や概念の整理に有効だ。国際協力，開発教育の実践者，これから行いたいと思っている方，とにかく知りたい方に一読をお薦めする。